

自発的な意味を表す表現について
—日本語と韓国語との比較を中心に—

高 恩淑

Expressions that Express Spontaneous Meaning
—Focusing on Comparing the Japanese Language
with the Korean Language

Eunsook KO

This paper focuses on spontaneous meaning expressions in the Japanese and Korean languages, and attempts to examine their syntactic features and the meanings they represent in sentences.

(1) Although sentences expressing “spontaneous progress”, “spontaneous establishment” and “spontaneous realization” differ in their meaning depending on the focus of the sentence, they can be regarded as “spontaneity in the broad sense” because they assume a situation (“spontaneous generation”) in which an action or state of affairs occurs spontaneously, independently of or against the will of the actor, just as in typical spontaneous expressions.

(2) The broad sense of spontaneous actors in “spontaneous progress”, “spontaneous establishment” and “spontaneous realization” is usually not explicitly stated in the sentence. However, these are expressions in which the presence of the behavioral agent (the speaker himself/herself) is considered in the background and is limited to affirmative sentences as in typical spontaneous expressions.

(3) Because “spontaneous progress”, “spontaneous establishment” and “spontaneous realization” are not an expression that conveys “the possibility of realizing an action”, like a sentence expressing possibility, these cannot be replaced by an analytic possibility form (‘(suru) kotoga dekiru’ in Japanese, ‘*hal swu iss-ta*’ in Korean).

Although sentences expressing “natural progression”, “spontaneous establishment” and “spontaneous realization” have been considered in previous studies to express the meaning of possibility in Japanese – as can be seen from the fact that in Korean, passive voice and change of action/state are expressed in the form of affixes ‘*-i, -hi, -li, -ki*’ and auxiliary verbs ‘*-a/e ci-ta*’ and ‘*-key toy-ta*’ – we can say that it is appropriate to consider these expressions as “spontaneity in the broad sense,” which refers to “spontaneity” rather than mere “possibility of action realization”.

Keywords : spontaneity in the broad sense, spontaneous generation, spontaneous progress, spontaneous establishment, spontaneous realization

1. はじめに

<自発>とは、動作主の意志とは関係なく、あるいはそれに反して自然にある動作・状態が生じる事態を表す文法的なカテゴリーである。その構文的な特徴をまとめると、次のようになる¹。

- ①受身文と同様に自発文では対応する能動文においてヲ格で示される名詞句がガ格で表される。
- ②通常動作主体は一人称で文中に明示されないことが多いが、明示される場合は二格で表される。
- ③自発文の述語動詞は典型的な意志動詞ではなく、無意志動詞に近い内的情態動詞（思考・知覚・感情・感覚）に限られる。
- ④自発文の述語動詞の形態は通常動詞の語幹に「-(r)are-ru」がつく。
・母国のことが思い出される / ・意気込みが感じられる

現代日本語における典型的な自発は、思考・感情を表す一部の動詞に限られるが、寺村（1982）は、<自発>を広く捉えて「焼ける、割れる、取れる、抜ける、切れる、折れる、解ける」など、五段活用他動詞の語幹に「-e-ru」をつけた形を「自発態」と呼んでいる。構文の意味を「あるもの（X）」が、自然

1 渋谷（1993）、尾上（1998）、日比（2000）を参照されたい。

に、ひとりである状態を帯びる、あるいはあるXを対象とする現象が自然に起きる（同論文：272）」とし、動作主体を問題にしない（省略ではなく構文上存在しない）、あるいは動作主体が意識されない点を自発の本質であると述べている。

渋谷（2002：30）は、このような他動詞の可能形と同形の自動詞について、「自発的な意味を表し、イツノマニカやテシマウなどと共起するが（変化動詞であるためテクルとは共起しない）、もともと動作主体は文構造のなかに含まれていないので、ウツカリといった、動作主体の存在を前提とする副詞とは共起しない。（中略）この点、動作主体を文構造のなかにもっている自発文とは異なっている（同論文：30）」と指摘している。

要するに、寺村（1982）で「自発態」と捉えられている動詞は典型的な自発とは言えないが、自発的な意味を有すると考えられる。本稿では、寺村（1982）の「自発態」を広義的な自発の一つと捉え、議論を進めていきたい。詳しくは、次の2節以降で見えていくことにする。

一方、韓国語における〈自発〉はまだ一つの文法的なカテゴリーとして定まっていないが、円山（2006）、（2007）、高（2011）は、‘-a/e ci-ta’²を受動・自発・可能・状態変化などの多様な意味を持つ補助動詞として捉えている。円山（2007）は、北海道方言の「ラサル」を媒介語として、日本語（共通語）の「ラレル」と韓国語の‘-a/e ci-ta’を対照することで、日本語の「ラレル」とは性質の異なる「自発用法」と「可能用法」の存在を明示している。日本語（共通語）の「ラレル」の自発用法は、「思う、考える、感じる、思い出す、ためらう」といった、認識・感情などの内的な行為を表す動詞に限られるが、韓国語の‘-a/e ci-ta’は、具体的な変化を含意する動詞、つまり、他動性が高い動詞でも〈自発〉を作ることができるかと述べている。

しかし、高（2015 a）では、〈自発〉を表す‘-a/e ci-ta’は、人の心理作用を表す感情動詞で主体の意志によるコントロールが難しい無意志的な動詞に限られるとし、他動詞に補助動詞‘-a/e ci-ta’が付いてモノ主語の属性を言い表す「풀어지다 phwul-e-ci-ta（解ケル）、깨어지다 kkay-e-ci-ta（割レル）、찢어지다 ccic-e-ci-ta（破ケル）、잘라지다 cal-la-ci-ta（切レル）、닦아지다 takk-a-ci-ta（拭ケル）」などは、自動詞化する用法として捉えている。また、円山

2 韓国語の表記は「Yale方式」ローマ字表記法に従うが、紙面の都合上該当する述語のみを表記する。

(2007) が自発表現として挙げている「콜라를 사려고 했는데 나도 모르게 녹차 버튼이 눌러졌다 [nwul-lye-cyess-ta] コーラを買おうと思ったのに、知らないうちに緑茶のボタンを押してしまった」のように、動作主が無意識に間違っ
て起こしてしまった失敗的な動作について、次のように述べている。

「こういった用法（他動性が高い動詞を用いた自発用法；筆者注）は、動作主の意図せぬ事態を捉えている点で<自発>と相通じるところもあるが、自ずと成り立つ動きや事態ではなく、動作主の不注意によって行われた失敗的な動作から生じる結果を表していることから、<自発>とは異なる。つまり、自然にある動作・状態が生じる自発用法ではなく、動作主の不注意によって付随的に生じる事態を言い表すことから自発文とは異なると言える（高 2015 a : 143）」

以上のように、日本語と韓国語において<自発>は捉え方によって狭義的にも、広義的にも捉えることができるが、本稿では<自発>を広く捉え「広義的な自発」について考察を試みる。以下では、日本語と韓国語において「広義的な自発」として捉えられる用法に焦点を当て、その構文上の特徴や文の表す意味を明らかにしていく。それにより、現代日本語と韓国語における「広義的な自発」の形式を明示することが可能になると考える。

2. 受身・可能・自発の連続性

上述したように、寺村（1982）は、次のように対応する他動詞を持っており、他動詞から派生したと考えられる自動詞（鈴木 1972 : 274）を<自発>としている。

◆ <他動詞 -u / 自動詞 -e-ru>

「焼く／焼ける、売る／売れる、取る／取れる、割る／割れる、解く／解ける、抜く／抜ける、脱ぐ／脱げる、砕く／砕ける、折る／折れる、切る／切れる」など。

これらの自動詞は他動詞の可能形と同形であることから、日本語において「可能」と<自発>に関わる問題として議論されることが多いが、これらに相当する韓国語の動詞を考えると、すべて受身形式で表現される点に注目したい。

英語や日本語の場合、ほとんどの他動詞が受身形式を用いることができる

が、韓国語は一部の動詞に限られる。韓国語において、典型的な受身の接辞は「-i, -hi, -li, -ki」であるが、すべての動詞がこの接辞によって受身文を形成するわけではない。「-i, -hi, -li, -ki」を用いて受身文を形成する動詞は、一部の他動詞に限られる。よって、受身の接辞「-i, -hi, -li, -ki」を補う形で、「-i, -hi, -li, -ki」が見つからない他動詞に補助動詞 ‘a/e ci-ta’ が、他動詞を作る漢語名詞に接辞 ‘-toy-ta’ がついて受身文を形成する（高 2015 b）。つまり、受身接辞や補助動詞をつけるにあたって、一定の規則がないため、語彙ごとに覚えなければならない（原著/大井訳/野間監修（2004：46）参照）。また、接辞「-i, -hi, -li, -ki」や、補助動詞 ‘a/e ci-ta’、接辞 ‘-toyta’ は、基本的に受身表現を作る形式として用いられるが、意味的な面において「語彙的な可能形式」として用いられることもある（高 2015 a）。

例えば、次のように日本語では他動詞の可能形の形式である「切れる」、「売れる」で表現される文が韓国語では受身の接辞とされる ‘-li’ をつけた形式で表現される。

- (1) 錆びた包丁なのによく切れる。
녹슨 칼인데 잘 잘린다 {cal-lin-ta}.
- (2) 高価商品なのに飛ぶように売れる。
고가상품인데 날개 돌힌 듯이 팔린다 {phal-lin-ta}.
- (3) こんな包丁で、肉が切れるだろうか。
이런 칼로 고기가 잘릴까 {cal-lil-kka} ?
- (4) リサイクルショップで高価商品が売れるだろうか。
리사이클숍에서 고가상품이 팔릴까 {phal-lil-kka} ?

上の例文は、いずれも誰が動作を引き起こすかは特に問題にならないため、構文上において省略されており、特定のモノや場所の性質を捉えている点で共通している。しかし、例（1）、（2）が、話し手の予想に反して自然と成り立つ動作を表している（「自然成立」）のに対し、例（3）、（4）は、モノ（「包丁」）や場所（「リサイクルショップ」）の属性による「動作実現への見込み」を述べている点で違いが見られる。よって、日本語において同じ可能動詞の形で表現されても、例（1）、（2）は、分析的な可能形式である「(スル)コトガデキル」に置き換えることができないが、例（3）、（4）は「(スル)コトガデキル」との置き換えが可能であり、むしろ「(スル)コトガデキル」を

用いた方がより「可能」の意味が明白に表れる³。このように、文の表す意味が異なることから、韓国語でも例(1)、(2)は、受身の接辞‘-li’でしか表現できないが、例(3)、(4)は次の例文のように可能形式「할 수 있다 ha-l swu iss-ta」⁴ (ある事を成す可能性や力がある)」に置き換えることができる。

(5) こんな包丁で、肉を切ることができるだろうか。

이런 칼로 고기를 자를 수 있을까 {ca-lul swu iss-ul-kka} ?

(6) リサイクルショップで高価商品を売ることができるだろうか。

리사이클숍에서 고가상품을 팔 수 있을까 {phal swu iss-ul-kka} ?

本稿では、例(1)、(2)のように、①ペアをなす自動詞と同じ形の他動詞の可能形が、②動作主無しで(構文上省略される)、③主題となるモノの性質により自然と成り立つ動作を表す場合、「自然成立」を表す「広義的な自発」として捉える⁵。こういったモノの属性による「自然成立」を表す広義的な自発は韓国語において、通常受身の接辞「-i、-hi、-li、-ki」や補助動詞‘-a/e ci-ta’で表現される。

松下(1930:352-363)は、「(ラ)レル」を用いる受動、可能、自発をそれぞれ人格的受動、可能的受動、自然的受動と称し、<被動態>の下位分類として扱っている。つまり、受動と可能、自発が同じ根から発しているとして捉えている。松下(1930)が、受身、可能、自発を被動の下位分類として扱っているように、日本語において受身と可能、自発が同じ根から発しているという点から考えると、韓国語においても主に受身形式とされる接辞「-i、-hi、-li、-ki」と補助動詞‘-a/e ci-ta’が可能や自発の意味で用いられるのは決して不思議なこ

3 日本語の可能表現の形式や用法などについては、渋谷(1993)を参照されたい。

4 可能形式‘ha-l swu iss-ta’は、形式動詞‘ha-ta’の語幹に「-(u)l(連体形語尾)+swu(形式名詞)+iss-ta(存在詞)」をつけた分析的な形式である。韓国語には日本語の可能動詞のような、「可能」を言い表す専用の可能形式がないため、日本語の分析的な可能形式「(スル)コトガデキル」に相当する‘ha-l swu iss-ta’が用いられる。

5 寺村(1982)は、「受動表現」は述語の表す事態を引き起こしたものの存在が意識されている点で「自発表現」とは異なり、可能表現も能力を持つ主体、または可能な状態にある主体を文の構成要素として持っている点が、「自発表現」とは明白に異なると捉えている。

とではない。実際、崔（1937：399）は補助動詞 ‘-a/e ci-ta’ に被動の意味以外にも「可能、自然（いわゆる、自発）」の意味があることを示唆している。

つまり、韓国語も日本語のように受身と可能、自発が連動しており、その例として取り上げられるのが接辞「-i, -hi, -li, -ki」と補助動詞 ‘-a/e ci-ta’ であると考えられる。日本語にしろ、韓国語にしろ、受身と可能、自発が相互に連動しており、その連続性や境界領域を探ることは容易なことではないが、両言語が共通の発想から出発しているという点は否定できない。

以下では、日本語と韓国語において、受身、可能、自発のつながりが見られる「広義的な自発」に焦点を当て、その構文的な特徴と文の表す意味について詳しく見ていくことにする。

3. 「自然進行」を表す広義的な自発

3.1 対象への評価と自然進行

まず、次の例文の違いに注目してもらいたい。

- (7) この酒はなかなか飲める。
- (8) この靴はまあまあ履ける。
- (9) このワインは甘くてどんどん飲める。
- (10) この漫画は面白くてあっという間に読める。

これらは、いずれも動作対象が「～は」で主題化され、可能動詞の形で表現されている。また、主題となるモノの性質を表し、動作主が誰なのかは特に問題にならないため文中に明示されない点で共通している。しかし、例（7）、（8）が単に話し手による動作対象への評価（「飲むに値する酒」、「履きやすい靴」）を表現しているのに対し、例（9）、（10）は動作対象への評価だけでなく、その性質により（それが原因で）、「飲む」「読む」といった動作が動作主の意志に関係なく自然と進んでしまうという意味をも含んでいる。つまり、例（7）、（8）は単に動作対象に対する評価を表す慣用的な可能表現であるのに対し、例（9）、（10）は動作対象の性質により、動作主の意図に関わらず自然と物事が進んでいく事態を表現することから、＜自発＞に近い意味合いを成すと言える。よって、例（7）、（8）は肯定的な評価を表す副詞成分（「なかなか、けっこう、まあまあ」など）や、否定的な評価を表す文末表現（「～たものではない」）と共起できるが、例（9）、（10）はそれができない。

本稿では、例(9)、(10)のように、可能動詞の形で動作主の意志とは関係なく、あるいはそれに反して自然と物事が進んでいく事態を表す表現を「自然進行」と呼ぶことにする。「自然進行」は、本来であれば動作主によりコントロールできる意志的な動作が、主題化される対象の性質により動作主の意図に関わらず動作が自然に進んでしまう事態を表す。「自然進行」を表す文は、知覚・認識・感情を表す動詞（無意志動詞に近い内的情態動詞）の語幹に「-(r)are-ru」がつく典型的な自発とは異なるが、文の表す意味から自発的な意味を表す「広義的な自発」として捉えることができる。

3.2 「受動的可能表現」との関わり

寺村(1982:259)は、態(ヴォイス)の連続性の観点から可能表現を次の二つに大別し、aを「能動的可能表現」とし、bを「受動的可能表現」としている。

- a. コノ魚ハ木ニノボレル(コノ魚ガ木ニノボレルコト)
- b. コノ魚ハ食ベラレル(コノ魚ガ食ベラレルコト)

- (11) この電話はどこへでもかけられる。
- (12) この動物は日本ではもう見られない。

(寺村 1982:260、一部変更)

「受動的可能表現」の特徴として、①他動詞の可能形で、②文中に動作主が存在せず⁶、③主題化される対象が「動作を受けるモノ」であることが挙げられるが、これは「自然進行」を表す広義的な自発(例(9)、(10))にも見られる特徴である。

しかし、「受動的可能表現」は、主題化される動作対象の属性による実現可能性の有無を表すのに対し、「自然進行」を表す広義的な自発はその属性により、動作主の意図とは関係なく自然と物事が進んでいく事態を表している点で区別される。どちらかと言えば、「受動的可能表現」がポテンシャルな事態を表すのに対し、「自然進行」を表す広義的な自発はよりアクチュアルな事態を

6 寺村(1982:259-260)は、「受動的可能表現」の動作主は構文上において省略されるのではなく、文構造のなかに含まれないと述べている。

表すと考えられる。いずれにせよ、「受動的可能表現」と「自然進行」を表す広義的な自発は、主に動作を受ける側の性質により動作・状態が成り立つこと（実現の可能性か自然進行かは異なるが）を表すことから、受身とのつながりが見られる表現として捉えることができる。

一方、上述した例（7）、（8）のように評価を表す可能表現も、動作主が文中に存在せず、主題化される「動作を受けるモノ」の属性を表している点で「受動的可能表現」と相通じるところがある。例えば、「この魚は食える／食えない」と言った場合、これは i) 「この魚はおいしい／まずい」という話し手による動作対象への評価を表す可能表現と、ii) 「この魚は食べられる／食べられない魚である」という「受動的可能表現」にも解釈できる。こういった構文は二義的にも読み取れるが、「受動的可能表現」が「動作を受けるモノ」のみを主題とするのに対し、評価を表す可能表現は人やモノ、場所など制限なく主題として取り上げられる点で異なる。また、評価を表す可能表現は、実現可能性の有無ではなく、主題となる対象に対する話し手の評価を言い表すことから、次の例文のように肯定的な評価のみならず否定的な評価を表す形式とも共起が可能である。

- (13) 彼はけっこう話せる（奴だ）。（話がわかる（奴だ））
 (14) このペンはなかななか／まあまあ使える。（役に立つ）
 (15) この町は住めたもんじゃない。（住みにくい）
 (16) 彼女の格好は見れたもんじゃない。（不格好だ）

よって、動作対象の属性による実現可能性の有無を表す「受動的可能表現」は可能形式の「(スル) コトガデキル」に置き換えることができるが、評価を表す可能表現や、「自然進行」を表す広義的な自発は、「(スル) コトガデキル」に置き換えることができない⁷。評価を表す可能表現や「自然進行」を表す広義的な自発を「(スル) コトガデキル」に置き換えると、文の表す意味が「受動的可能表現」のように動作対象に属している特徴として捉えられる実現の可能性を表すようになってしまう。

7 渋谷(1995)は、可能動詞と「(スル) コトガデキル」の意味・用法を詳しく取り上げており、評価を表す可能動詞は「(スル) コトガデキル」に置き換えられないと述べている。

この他に、「自然進行」を表す広義的な自発は、動作主の意志に関係なく自ずと進んでいく事態を支えるために、理由節や副詞成分「いつの間にか、あっという間に、ひとりでに」などを伴う。また、次の例 (17)～(20) のように「自然進行」の意味を強める役割として補助動詞「～てしまう」をつけることも可能であるが、評価を表す可能表現 (例 (21)、(22)) や、「受動的可能表現」 (例 (23)、(24)) はそれができない。

- (17) このワインは甘くてどんどん飲めてしまう。
- (18) この漫画は面白くてあっという間に読めてしまう。
- (19) この米はおいしくて何杯も食べられてしまう。
- (20) この映画は面白くて何度も見られてしまう。

- (21) ?この酒はなかなか飲めてしまう。
- (22) ?この靴はまあまあ履けてしまう。
- (23) ?この魚は食べられてしまう。
- (24) ?この電話はどこへもかけられてしまう。

以上の評価を表す可能表現と受動的な可能表現、「自然進行」を表す広義的な自発の類似点と相違点を簡単にまとめると、次のようになる。

【表 1】

	評価を表す可能表現	受動的な可能表現	自然進行を表す広義的な自発
類似点	a. 動作主は特に問題にならないため、文中において明示されない。 b. 述語動詞は動作主によりコントロールできる意志的な動作を表す動詞で、可能動詞の形で表現される。 c. 話題にする対象は、主に「～は」で主題化される。 d. 主題となる特定の対象の性質を表す。		
		主に動作を受ける側の性質により動作・状態が成り立つこと（自然進行か実現の可能性かは異なるが）を表し、受動的な意味を持つ。	
	文の表す意味は、肯定・否定を問わず自由に表現できる。		
相違点	a. 人やモノ、場所などを制限なく主題として取り上げることができる。 b. 肯定的な評価を表す副詞成分（「なかなか、けっこう、まあまあ」など）や、否定的な評価を表す文末表現（「～たものではない」）と共に、主題化される対象に対する話し手の評価を言い表す。 c. 慣用的な表現として用いられる可能表現であるため、「(スル) コトガデキル」に置き換えることができない。	a. 動作を受けるモノ（「される側」）だけが主題化される。 b. 動作対象の属性による実現可能性の有無を表すことから、「(スル) コトガデキル」に置き換えることができる。	a. 自ずと進んでいく事態を支えるために理由節や副詞成分「あつという間に、うっかり、ひとり」などが来る。 b. 補助動詞「-てしまう」と共起し、動作主の意志とは関係なく自然と物事が進んでいくことを表現する。 c. 典型的な自発と同様に肯定文でしか表現できない。 d. 自然進行を表す広義的な自発で、「(スル) コトガデキル」に置き換えることができない。

3.3 韓国語における表現形式

ここまで、日本語における評価を表す可能表現と受動的な可能表現、「自然進行」を表す広義的な自発について考察を試みた。これらを韓国語で表現すると、受動的な可能表現には、「ある事を成す可能性や力がある」ことを言い表す分析的な可能形式 'ha-l swu iss-ta' を用いることができるが、評価を表す可能表現や、「自然進行」を表す広義的な自発には、韓国語でも可能形式を用いることができない。その代わりに評価を表す可能表現には、「それをするだけの値打ちがある／ない」ことを言い表す補助形容詞 '-(u)l⁸ man-ha-da'（肯定文）、または '-key moc-toy-ta'（否定文）が用いられる。「自然進行」を表

8 前に来る用言の語幹が子音か母音かで分かれる。子音の場合は「-ul」が母音の場合は「-l」がつく。

す広義的な自発には、次の例文のように今までとは異なる動作・状態の変化を表す補助動詞 ‘-key toy-ta’ (「～するようになる、～することになる」) がつく⁹。

- (25) このワインは甘くてどンドン飲める。
이 와인은 달달해서 계속 마시게 된다 [ma-si-key toyn-ta].
- (26) この漫画は面白くてあっという間に読める。
이 만화는 재미있어서 눈깜박할 사이에 읽게 된다 [ilk-key toyn-ta].
- (27) この米はおいしくて何杯も食べられる。
이 쌀은 맛있어서 몇 그릇이나 먹게 된다 [mek-key toyn-ta].
- (28) この映画は面白くて何度も見られる。
이 영화는 재미있어서 몇 번이나 보게 된다 [o-key toyn-ta].

このように、評価を表す可能表現と受動的な可能表現、「自然進行」を表す広義的な自発は日本語では同じ動詞の可能動詞の形で表現されるが、韓国語では文の表す意味の違いから異なる形式で表現される。

4. 「自然成立」を表す広義的な自発

4.1 モノの属性による自然成立

特定のモノの属性を表す表現には、次のような例もある。

- (29) = (1) 錆びた包丁なのによく切れる。
녹슨 칼인데 잘 잘린다 [cal-lin-ta].
- (30) = (2) 高価商品なのに飛ぶように売れる。
고가상품인데 날개 돌힌 듯이 팔린다 [phal-lin-ta].
- (31) 古い布巾だけど、油污れもきれいに拭ける。
오래된 행주인데, 기름때도 깨끗하게 닦아진다 [takk-a-cin-ta].
- (32) 安い鉄板だけど、肉がおいしく焼ける。
싼 철판인데, 고기가 맛있게 구워진다 [kwu-we-cin-ta].

9 高 (2015 b : 157) は、「補助動詞 ‘-key toy-ta’ は通常今までと違った動作・状態の変化を表すが、文脈によって単なる<状態変化>を表したり、<受動>や<可能>、<自発>を表したりする」と述べている。

これらは、2節で述べたように話し手の予想に反して特定のモノの性質により自然と成り立つ動作（「自然成立」）を表す広義的な自発である。日本語では自他のペアになっている自動詞と同形の他動詞の可能形で表現されるが、韓国語では受身形式として用いられることが多い接辞「-i, -hi, -li, -ki」（例（29）、（30））や補助動詞 ‘-a/e ci-ta’（例（31）、（32））で表現される。寺村（1982）で「自発態」と捉えられている「焼ける、割れる、取れる、抜ける、切れる、折れる、解ける」などがこれに当たる。基本的に話題となるモノが「～は」で主題化されることが多く（韓国語でも同様）、上記の例文もそれぞれ「包丁、高価商品、布巾、鉄板」が構文中に省略されていると考えられる。

一方、「自然成立」を表す広義的な自発は、自然的な現象を表すモノ主語の自動詞文とは異なる。

- (33) 花が落ちる。
 (34) 紙が燃える。
 (35) 洗濯物が乾く。

上の自動詞文は、「自然にそうなる」ことを表すことから、「自然成立」を表す文と類似しているように見えるが、文の構造が大きく異なる。例（33）～（35）は非情物主格をとっていて、そもそも動作主が文構造の中に含まれない自動詞文であるため、単に動作主が文中において省略されている「自然成立」を表す広義的な自発とは異なる。つまり、意味上において自発に近い意味を持っていても文構造が全く異なるため、いくら自発を広く捉えて考えてもこういった自動詞文を広義的な自発に含めることはできない。

4.2 恒常的属性を表す可能表現との関わり

次のように、主題化されるモノの恒常的な属性による実現の可能性を表す可能表現も、「自然成立」を表す広義的な自発とは異なる。

- (36) この鉛筆は字がよく書ける。
 이 연필은 글씨가 잘 써진다 {sse-cin-ta}.
 (37) この消しゴムはボールペンも消せる。
 이 지우개는 볼펜도 지워진다 {ci-we-cin-ta}.

(38) このハサミは何でも切れる。

이 가위는 뭐든지 잘라진다 [cal-la-cin-ta].

これらは、上述した受動的な可能表現（「この魚は食べられる」類）と同様に実現の可能性が主題化される対象に恒常的に備わっていることを表す可能表現である。主題となるモノの恒常的な属性による動作実現への可能性を捉えていることから、可能形式「(スル) コトガデキル」に置き換えることができる。また、韓国語の場合、ここでは受身形式や語彙的な可能形式として用いられる補助動詞 ‘-a/e ci-ta’ で表現されているが、日本語と同様な理由で可能形式「ha-l swu iss-ta」との置き換えが可能である。

一方、こういった潜在系の可能表現はテンスから解放された恒常的な属性を表す文で、もともと状態性を持っているため「テイル」形が見つからない（例 (39)、(40)）が、「自然成立」を表す広義的な自発は、出来事を表す表現であることから、「テイル」をつけて発話時において自然と成り立っている事態の状態を表す（例 (41)、(42)）。

(39) ?この消しゴムはボールペンも消せている。

(40) ?このハサミは何でも切れている。

(41) 古い布巾だけど、油污れもきれいに拭けている。

(42) 安い鉄板だけど、肉がおいしく焼けている。

以上のように、主題となるモノの属性による事態の「自然成立」を表す文は、構文的な特徴や文の表す意味から、3節で述べた「自然進行」を表す広義的な自発（「このワインは甘くてどんどん飲める」類）と類似しているように見えるが、形態的な面において次のような違いが挙げられる。

- ① 「自然進行」を表す文と「自然成立」を表す文の動作主は、いずれも文中に現れないが、「自然進行」を表す文は受動的な意味を持っており、文中に明示されなくても背景に話し手本人である動作主の存在が意識される。それに対し、「自然成立」を表す文は、動作主が不特定で誰が動作を引き起こしたかは特に問題にならないため、動作主の存在は意識されない。つまり、両者は動作主が特定できるか否かで区別される。
- ② 「自然進行」を表す文は、主題化されるモノの性質により動作主の意志

とは関係なく動作が自然に進んでしまう事態を表すが、「自然成立」を表す文は、主題として取り上げられるモノの性質により動作主の意志とは関係なく自然と成り立つ動作の実現を表す。つまり、「自然進行」を表す文は動作主の意図に関わらず自然に進む「動作の進行過程」に注目するのに対し、「自然成立」を表す文は、自然と成り立つ「動作の結果」に注目するという点で異なる。

5. 「自然実現」を表す広義的な自発

広義的な自発には、次のようにいつもとは異なる状況を表す表現として、一時的ではあるが動作主にとって望ましいとされる事態が自然と実現することを表す場合もある。

- (43) 今日はご飯が（よく）食べられる。（「胃がご飯をうけつける」意味）
 오늘은 밥이 잘 먹힌다 {mek-hin-tal}.
- (44) 今日は魚が（よく）釣れる。
 오늘은 생선이 잘 잡힌다 {cap-hin-tal}.
- (45) 今日は本が（よく）読める。（「読み進みがいい」意味）
 오늘은 책이 잘 읽어진다 {ilk-e-cin-tal}.
- (46) 今日は歌が（うまく）歌える。
 오늘은 노래가 잘 불러진다 {pwul-le-cin-tal}.

これらは、動作の実現を動作主が意図してコントロールするのではなく、動作主にとって望ましいと思われる事態が自ずと実現することを言い表すことから、「自然実現」を表す広義的な自発として捉えられる。「自然実現」を表す文は、動作主が意図して当該動作をコントロールするわけではなく、動作の生起から実現までの間に「過程の困難」がないため、自然と物事がうまくいく状況を表現する。「何故か、思いがけず、意外と」などの（-）意志性の副詞成分と共に、動作主の意図的な行為による事態実現ではなく、自ずと成り立つ「自然実現」であることをより明確に示すことができる。「自然実現」を表す広義的な自発は、日本語において可能形の形式で表現されるが、典型的な可能表現のように「実現可能性の有無」や動作主が意図して行う「実現」を表すのではなく、動作主の意図や努力なしの「自然実現」を表すことから、「(スル)コトガデキル」に置き換えることができない。

一方、韓国語では「自然成立」を表す広義的な自発と同様に、「自然実現」を表す文も、基本的に主に受身形式とされる接辞「-i, -hi, -li, -ki」と補助動詞‘-a/e ci-ta’で表現される。上の例文(43)、(44)には接辞‘-hi’がつき、例文(45)、(46)には補助動詞‘-a/e ci-ta’がついているが、接辞「-i, -hi, -li, -ki」や補助動詞‘-a/e ci-ta’をつけるにあたって、一定の規則はない。通常接辞「-i, -hi, -li, -ki」を補う形で、接辞がつかない動詞に補助動詞‘-a/e ci-ta’が使用されるが、次のように両方の形式が用いられる場合もある。例(47)は、「自然成立」を表し、例(48)は「自然実現」を表す広義的な自発である。

(47) = (31) 古い布巾だけど、油汚れもきれいに拭ける。

- a. 오래된 행주인데, 기름때도 깨끗하게 닦인다 [takk-in-ta].
- b. 오래된 행주인데, 기름때도 깨끗하게 닦아진다 [takk-a-cin-ta].

(48) = (45) 今日は本がよく読める。(「読み進みがいい」)

- a. 오늘은 책이 잘 읽힌다 [ilk-hin-ta].
- b. 오늘은 책이 잘 읽어진다 [ilk-e-cin-ta].

このように、接辞「-i, -hi, -li, -ki」と補助動詞‘-a/e ci-ta’を用いる文はどちらも日本語に訳すと同じ意味を表すようになる。韓国語においても、さほど意味上の違いは見られないが、南・高(2007:300)は、接辞を使う‘ilk-hin-ta’は何も「望まなくても、自ずとそうなるという意味を持つ」のに対し、補助動詞を使う‘ilk-e-cin-ta’は「そういった結果が生じることを望むある意図的な力が加えられてそう成っていくこと」を表している点が異なる(筆者訳)としている。確かに、このような傾向も否定はできないが、どちらかといえば両者は動点の置き処が異なると考えられる。例(45)、(46)のaのように接辞「-i, -hi, -li, -ki」を用いる文の方は、「自然とそうなる出来事の状態変化の結果」に重点が置かれるのに対し、例(45)、(46)のbのように補助動詞‘-a/e ci-ta’を用いる文は、「そういった結果が生じるまでの出来事の変化過程」に重点が置かれる。しかし、いずれも文中における意味上の違いは見られないため、このような規定がどこまで有効であるかは、さらに検討を要するところである。

以上、ここまで3節から5節にかけてそれぞれ「自然進行」「自然成立」「自

然実現」を表す広義的な自発について考察を試みた。これらは動作主の意図により動作を引き起こすのではなく、自然と成り立つ動作を表す表現で、典型的な自発と同様に、肯定文に限られる。これは否定文の場合、無意識にせよ動作主の意志が働いてしまうからである。本来、自発表現というのは動作主の意志とは関係なく、あるいはそれに反して、自然にある動作・状態が生じる事態を言い表す。つまり、自発は「自然生起」が前提となる表現であるが、それが否定文になると、ある動作・状態を起こらないようにする、または成り立たなくするために事態の生起過程に動作主の意志が何らかの形で入り込むようになってしまう。動作主の意志介入により、自ずと生じる事態が阻まれると自発の意味は表れないため、肯定文に限られると考えられる。

6. 終わりに

本稿では、日本語と韓国語において広義的な自発として捉えられる「自然進行」「自然成立」「自然実現」を表す文について考察を行った。これらに共通して見られる構文上の特徴や文の表す意味を簡単にまとめると、次の通りである。

- ① 述語動詞は動作主によりコントロールできる意志的な動作を表す動詞で、日本語では可能動詞の形で表現され、韓国語では受身や動作・状態の変化を表す形式（接辞「-i、-hi、-li、-ki」や補助動詞‘-a/e ci-ta’、‘-key toyta’）で表現される。
- ② 動作主は通常文中に明示されないが、典型的な自発と同様に背景に話し手本人である動作主の存在が意識される。
- ③ 典型的な自発と同様に事態の自然生起が前提となっており、肯定文でしか表現できない。
- ④ 可能を表す文のように、動作実現の可能性を表す表現ではないため、分析的な可能形式（日本語では「(スル)コトガデキル」、韓国語では‘hal swu iss-ta’）に置き換えることができない。
- ⑤ 「自然進行」「自然成立」「自然実現」を表す広義的な自発は、焦点の置き所により文の表す意味に違いは見られるが、典型的な自発と同様に動作主の意志とは関係なく、あるいはそれに反して、自然にある動作・状態が生じる事態（「自然生起」）が前提となっている点で共通している。

本稿で取り上げた「自然進行」「自然成立」「自然実現」を表す文は、従来の

研究において日本語では可能の意味を表すと考えられてきた。しかし、日本語において「(スル)コトガデキナイ」に置き換えられない点と、韓国語において受身や動作・状態の変化を表す形式(接辞「-i、-hi、-li、-ki」や補助動詞‘-a/e ci-ta’、‘-key toyta’)で表現されることから考えても、「動作実現の可能性」ではなく、「自然にそうなる」ことを言い表す「広義的な自発」として捉えることが妥当であると言えよう。

典型的な自発表現が、動詞の語幹に「-(r)are-ru」がつく知覚・認識・感情に関する動詞に限られる点から考えると、ここに取り上げているタイプの文は自発として捉えることが難しいかもしれない。しかし、本来自発とは、動作主の意志とは関係なく自ずと生じることを表す表現で、事態の自然生起が前提となっている。本稿で取り上げた「自然進行」「自然成立」「自然実現」を表す文もすべて「自然生起」を前提としたうえで、物事が自然に進むこと(「自然進行」)や、それが自ずと成立すること(「自然成立」)、またはそれがひとりでに実現すること(「自然実現」)を表す。また、「自然進行」「自然成立」「自然実現」を表す文は、①文中に明示されない動作主の存在が意識される点、②肯定文で表現される点、そして③分析的な可能形式との置き換えができないという点で、典型的な自発と相通じていると考えられる。

以上のような構文的な特徴や文の意味特徴から、「自然進行」「自然成立」「自然実現」を表す文は、自発表現の広がりとして「広義的な自発」と捉えることができる。

【参考文献】

<日本語で出版されたもの>

- 尾上圭介(1998)「文法を考える6 出来文(2)」『日本語学』17巻10号, pp.90-97
 高 恩淑(2011)「補助動詞‘-a/e cita’が表わす<可能>と<自発>について」『日語日文学』第50号, 大韓日語日文学会, pp.125-146
 高 恩淑(2015a)「第6章 韓国語における語彙的な可能形式(1)」『日本語と韓国語の可能表現』ココ出版, pp.125-146
 高 恩淑(2015b)「第7章 韓国語における語彙的な可能形式(2)」『日本語と韓国語の可能表現』ココ出版, pp.147-163
 渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33巻第1冊
 渋谷勝己(1995)「可能動詞とスルコトガデキル—可能の表現—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版, pp.111-120
 渋谷勝己(2002)「自発」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』科学研究費補助金基盤研究(B)報告書, pp.29-35

- 渋谷勝己 (2006) 「自発・可能」『シリーズ方言学2 方言の文法』岩波書店, pp.47-92
- 金田一春彦 (1957) 「時・態・相および法」『日本文法講座1 総論』明治書院, pp.223-245
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味1』くろしお出版
- 日比伊奈穂 (2000) 「不随意性と自発—現代日本語の自発として追加すべき用法—」『日本語・日本文化研究』第10号, 大阪外国語大学日本語講座, pp.105-115
- 白 峰子 著/大井秀明 訳/野間秀樹 監修 (2004) 『韓国語文法辞典』三修社
- 円山拓子 (2006) 「補助動詞cidaが表わす「可能」の意味分布」『日本語と朝鮮語の対照研究』東京大学21世紀COEプログラム「心とことば—進化認知科学的展開」研究報告書東京大学, pp.63-76.
- 円山拓子 (2007) 「自発と可能の対象研究—日本語ラレル、北海道方言ラサル、韓国語cita—」『日本語文法』7巻1号, pp.52-68.
- 松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』中文館

<韓国語で出版されたもの> [日本語訳は筆者による]

- 남기심·고영근 (2007) 『표준국어문법론』개정판 탐출판사
- [南基心·高永根 (2007) 『標準国語文法論』改訂版 塔出版社]
- 최현배 (1937) 『우리말본』정음사
- [崔鉉培 (1937) 『Wulimalpon』正音社]